日本

ホームレスの人たちの「負けない」進み方

湯浅 誠

「ホームレス」という言葉には、実はかなり複雑な定義が必要である。ここでは文字どおり路上で生活する野宿状態の人を指すが、路上生活者問題が社会的・政治的に「認知」され、「ホームレス」問題としてかなり広い範囲で議論されるようになったのは、日本では九〇年代半ばであった。

この一〇年間に焦点をあててその中心的な拮抗点を挙げれば、多くの社会問題に共通するように、排除と社会統合、そしてオルタナティブという三大項目に集約されるだろう。排除とは〈私たちの社会〉から追い出すこと、見えなくすること、社会統合とは〈私たちの社会〉に同一化させること、同一化させる方向で迎え入れること、オルタナティブとは排除でも社会統合でもなく、〈私たちの社会〉を前提にせず、むしろそのあり方を問うこと、といえば、単純化しすぎる嫌いはあるが、わかりやすいかもしれない。

本稿では、その三大項目を軸にしながら、ホームレスの「再生」ということについて、私自身の意見をまとめてみたい。

反―排除から始まり社会に変容を求めたホームレス運動

ホームレス運動は「反―排除」から出発した。それは、行政が「排除」を通じてホームレス問題を認識したからである。駅構内や路上にいる人、公園にいる人たちの排除が、ホームレス状態にある人たちの激増にともなって目立ち始めた頃、それに対抗する形でホームレス運動は誕生した。

排除に対して反―排除を掲げること、それは必ずしも社会統合を目指す取り組みとは限らない。当初のホームレス運動の重点は社会に対して変容を迫るものだったように思われる。

ホームレス状態にある人たちに食事を配る「炊き出し」は、通常ボランティアたちが当事者たちに食事を支給する活動と思われがちだ。しかし、自分たちの活動を「運動」と認識していた人たちの重点は、ホームレス状態にある人たちが自分たちで食事を準備する「共同炊事」形式にあり、そして炊き出しの場所は当事者たちの情報交換・出会いの場である「寄り場」として重要だった。食事は、極端にいえばキッカケであり、むしろ自主性や共同性、横のつながりを育むことに炊き出しの主要な意義が見出されていた。そこでは、自分たちを排除する社会の側への抗議としての「団結」があった。「屋根と仕事」を求める単刀直入なスローガンは、それ自体としては公営住宅だったり公的就労だったり、いわゆる社会資源へのアクセスを自分たちにも認めることを要求しつつも、同時にホームレスを生み出す社会に対して質的な変容を迫るメッセージが色濃く伏在していた。

排除を含んで進む社会統合

しかし二〇〇〇年以降、実際に社会統合が始まってみると、様相は変わってくる。二〇〇〇年冬、東京で都区共同による自立支援事業が本格実施された。自立支援事業とは、ホームレス状態にある人たちが一定期間生活できる施設を開設し、入所者はそこで最低限の衣食住の安定を確保しながら就労活動を行ない、「自立」していく事業である。二〇〇一年夏には国が「ホームレスの自立支援等に関する特別措置法」を制定。現在、それにしたがって全国の各自治体で自立支援プログラムが稼動し始めようとしている。二〇〇四年秋には、東京都内の五つの公園（新宿中央公園、戸山公園、隅田公園、上野公園、代々木公園）で、主にテントを設営しているホームレスを対象に

★ゆあさ・まこと／1995年ごろより「ホームレス」問題に携わる。現在、〈便利屋あうん〉でリフォームチームの見習いとして生計を立てる傍ら、〈NPO法人自立生活サポートセンター・もやい〉事務局長（アパート入居時の連帯保証人提供と生活支援）、〈ホームレス総合相談ネットワーク〉事務局（ホームレス支援の法律家グループ）など。